

サンディエゴ日本人教会トピックス

【2018年3月特別号 十字架上の七言】

サンディエゴ教会では3月30日夜7時よりグッドフライデー礼拝が日英合同で持たれました。今年は7人の方々により、イエス様の十字架上の七言をシェアしました。イエス様はこれらのお言葉をどんな思いで十字架上で言われたかを、各自の立場から証と共にシェアしていただきました。

会衆一同はイエス様の十字架を思い、息を飲むように聞き入り、二千年前、私達の罪のために成してくださった贖いは、現在の私達の心に語り次がれ、そのみ思いを心に留めて聴き入ったことでした。集会の半ばには、特別賛美「Crucified」（十字架にかかりて）を4人の英語部の方々が賛美され、会堂いっぱい十字架のイエス様の思いが響きわたり、主のみ名を称えました。アーメン。

聖書朗読：「百卒長はこの有様を見て、神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人であった」と言った。この光景を見に集まってきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰って行った。すべてイエスを知っていた者や、ガリラヤから従ってきた女たちも、遠い所に立って、これらのことを見ていた。」ルカ23章47～49節

1. 「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」 ルカ23章34節

スカーレット美樹姉

この御言葉を繰り返し読んで感じたことは、もし私たち人間がこのイエス様と同じ状況の中にいたら、到底言う事の出来ない祈りの言葉だと。でも、この限りない主の情け、これこそが主の無条件の愛、アガペーなのだ痛感しました。

この二年間は、私にとって人生が混乱していた期間でした。自分の置かれていた状況に自分の判断で対応し、神さまに頼るべきと感じつつも、神さまを頼らずに

過ごしていました。まさしく、このイエス様の祈りの対象の「彼ら」とは私自身のことなのです。

そんな中で生きていたものですから、徐々に体にも影響が及び今まで患っていた首の痛みが悪化し、検査の結果、首の骨に異常がみられ、痛みを抑える為にいろいろな鎮痛剤を飲むようになりました。どれを処方されても痛みは改善されない中オピオイド系の鎮痛剤を飲むようになった時には、神さまなんていないかもしれない。とその様な気持ちになることもしばしばありました。

二十年以上イエスキリストを信じて来て、こんな気持ちになるのは初めてでした。士師記時代の人々の生き方がどのような結果をもたらすかという事が脳裏にちらつきつつも、神さまがいなく自分がやりたいように好き勝手に生きれたら、その方が断然楽かもしれないとも思いました。

自分の信仰が崖っぷちに立たされて、自分が生きているという存在すら消したくもなり、夫には随分悩ませるような事を言ったりしたりした事を覚えています。皆さんもご存知だと思いますが、オピオイド系の鎮痛剤は依存性が高く、乱用者も多く、現在アメリカが抱えている社会問題の一つになっています。私は、この薬を飲み続けるのは危険だと感じ、直ぐにやめました。

その後ペインマネジメントの医師に診てもらい、また違った鎮痛剤を処方されましたが痛みは改善されず途方に暮れていました。そんな時、大倉先生のクリスマスメッセージの中で語られていた“心の平安 inner peace”に心が動かされました。

私にとってのインナーピースとは、、、と自分に問いかけた時に、あゝやはり私を生かしてくれるものは主の無条件の愛、アガペーしかないのだと気づかざるを得なかったのです。

今年の一月に、やっと私の症状を把握できる専門の医師にめぐりあい、現在は、徐々に薬の量を減らし、薬に頼らずに痛みを和らげる治療をしている最中です。

そして、主が私の心の平安、インナーピースだと自覚して生きている事が体の回

復に繋がっているという事に対し、自分自身驚いていると同時にそれは自然な結果なのかもしれないと思っています。

そして、この御言葉に私がどう答えることができるのか、と思った時にできることは、神さまがこんな私をも赦してくださるのだから、私自身も心から人を赦すようになりたいと願うようになりました。

私は、日本の家族といろいろあり、特に父方の伯母との関係に深い心の傷を負っていて、ここ一年半以上音信不通の状態でした。

でも、二日前にこの御言葉「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」の意味をよく考えていた時に、自然と伯母に電話したいという気持ちになり、その後思い切って電話をしました。

電話をする直前には、やっぱり伯母さんに電話するのは怖い、また傷つくかもしれない、と思いましたが、神さまに「私には主のアガペーがあるから、大丈夫です。ですから、電話する勇気をお与えください。」と祈りました。

伯母は、久しぶりに私と話を出来たことを喜び、体に気を付けて過ごすようにと伝えてくれました。もっと早く連絡できていたら、、、とも思いましたが、これは私が御言葉に答えようとしたから進んで出来たことなのだと思います。

このようなことから、毎日の些細な人間関係まで、自分が神さまに赦されているのだから、人をジャッジせずに赦すという事、そしてその人の為に祈るという人は人として成長し豊かに生きていく為には必要なのだと実感しました。

このグッドフライデー、私たちの為に十字架にはりつけにされたイエス様の無条件の愛、アガペーを今一度覚えて、イースターを迎えられたらと願っています。

追記：いろいろ葛藤の中にいたときも、私の為に祈ってくれている方々いた（現在もそういう方々がいる）という事に感謝です。主はやはりいつも私のそばにいてくださるのです。

2. 「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいるであろう」 ルカ23章43節

Carlos Carter 兄（英語部：英語圏の方なので省略します。）

3. 「婦人よ、ごらんなさい。これはあなたの子です。」「ごらんなさい。これはあなたの母です」 ヨハネ19節26～27節

町田かおり姉

十字架につけられ、血を流すという肉体の痛みと、父なる神との断絶という霊的な苦しみの中であって、イエス様はご自分を産み育ててくれた母マリアの事を案じ、弟子のヨハネに母を宜しく頼むと言われました。イエス様は、一人の人間の息子として、母マリアに愛を示されたのです。

「婦人よ、ごらんなさい。これは、あなたの息子です。」「ごらんなさい。これは、あなたの母です」 このみ言葉を、この一ヶ月ほど思い巡らして来ました。マリアと同じように、私も母親です。公生涯を送られたイエス様と同年代の息子達が二人います。ですから、マリアの気持ちになって、この箇所を読むと、とても他人事のように思えません。おなかに子供を宿した時から、子供のためにその子の幸せを願い、苦しむ事がないように祈り続けます。ですから、私だけでなく、母である人達ならば、目の前で愛する我が子が十字架につけられ血を流し苦しむ姿をただ何も出来ずに見つめているマリアの胸を剣で刺し抜かれるような苦しみを想像する事はできると思います。子供の苦しみ痛みは、母の痛み、苦しみです。

今回、このみ言葉を思い巡らしながら、もう一つ心に浮かんで来たのは、地上で苦しんでいる母と同じように、いいえ、それ以上に胸をえぐられ、引き裂かれる思いで苦しみ、涙を流される父なる神のお姿でした。引き裂かれる思いだけではなく、きっと父なる神様も、イエス様と同じように、そのお体が引き裂かれ痛み苦しまれたのではないのでしょうか。無力な人間の母とは違い、愛する独り子の苦しみを取りのける事のお出来になる神様が、あえてそれをなさらなかった苦しみは、想像すらする事は出来ません。

このような苦しみを、イエス様も父なる神様も、なぜ黙って受けられたのでしょうか。言うまでもなく、この私の罪のために、この私を永遠の苦しみから救い出すために、一方的にあちらから示された、神様の御愛ゆえなのです。

これほどまでに、私を愛してくださっている神様の御愛に私は、どう、お応えすればよいのか、今回与えられたみ言葉は、私に何を語っておられるのか、深く考えさせられました。

私には、日本に実の母と主人の母が居ます。ニューヨークに長男が、そしてサンディエゴに共に暮らす次男がいます。年老いた日本の母達、二人の息子達に対する責任を、神様はこのみ言葉を通して示されました。それは、彼らを愛し敬い、何よりも祈り続ける事です。

母達、そして長男の救いのために祈る、すでに救われた次男が、主にお仕えする者として歩んでいく事のために祈る事です。

そして、このサンディエゴに置かれ、生かされている私に、血の繋がっていない、母や父のような方々、自分が産んではいないけれども、子供のような方々に対して、我が親、我が子のように愛し仕えなさいと、神様は命じておられると思います。

大きな十字架の苦しみを通して示された、ご愛を受けた者として、このご愛を無駄にしないで、人に仕え神様に仕える者となさしめて下さいと祈ります。尊い主のみ名を心より崇めます。

4. 「エロイ、エロイ、ラマ、サバクタニ」と叫ばれた。それは「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である」 マタイ27章46節

渡邊晴香姉

イエス様が三時頃大声で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」と叫ばれたことにつ

いて、これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味であると言う事を知って～どれだけ苦しまれた事でしょう、とても痛々しい言葉だと思えます。

私達の罪罰のために、十字架につけられて、沢山の苦しみを受け、自分の命を私達のために捧げてくださったのです。イエス様は、今まで神様の事を「お父さん」と呼んでいたのですがこの時初めて、イエス様は神様の事を「お父さん」ではなく「神様」と呼んだのです。

それは、今まで完璧だったイエス様がこの時、私達の罪全体を背負ったため、身体的にも精神的にも苦しみ、お父さんである神様から一時的に離れたため、「神」と呼びました。それは私達罪人の立場に立ってたくさんの苦しみを受けてくださり、イエス様は私達を愛するために、身代わりに、引き受けてくださったという事だと学びました。みな様に是非この事を知っていただけるとありがたいです。

5. 「わたしは、かわく」 ヨハネ19章28節

スコット恵子姉

去年、私は数十年ぶりに初めて参加する主人を連れてグッドフライデー礼拝に参加させて頂きました。そして、イエス様の十字架上での7言のシャアリングを聞かせて頂き、大変に恵まれた時を過ごすことが出来ました。その帰りになんと主人が「来年は自分がシャアリングをしてもいいです。」などと牧師先生に口走っていたのです。でも、私はそれを聞き流していました。そして、早や一年が過ぎ、また、グッドフライデーの時期が訪れました。日語部と英語部の牧師先生方は例年通りに7名のシャアリング者を募り始めました。その際、お一人の牧師先生より主人が「口走った」あの「話」が舞い上がってきたのです。「ご主人さまは、確か去年…」、私は「あ、覚えておられた。」とハッとしました。その旨を主人に話しましたところ、彼は数日ほど自分で祈り考えた後に、そのお話を引き受ける事としたのです。その事をその牧師先生に報告しましたら、もうお一人の牧師先生より「あなたは如何でしょうか」と問われました。私はとっさに、「あ、きたー」と思い、即答で「いえいえ、私は結構です。」とお断りをしたのです。でも、その牧師先生、その辺は慣れておられるので、お上手に交わされて、「では、考えてみて下さい。」とキーワードをサラッと言われました。そして、私はその事について

「考えて」祈りました。その、結果、今年は主人と同様に私も十字架上の7言のシャアリングを担当させて頂く事となったのです。

さて、私はイエス様の語られた5番目のことば、「私は渴く」"I thirst" (ヨハネ 19:28) を担当させて頂きました。先ずは「渴く」の意味です。辞典で「渴く」とは「喉の潤いが無くなり、水分を取りたくなる。」また、「比喩的には、潤いにかけた環境・状態にいて、潤いとなるものを求めるときに感じる」と書いてあります。例えば、「親の愛に渴く」、「心が渴く」、「渴望(カツボウ)」、など満たされない気持ちがいらだたいほど高まった時、心から強く何かを欲しがる時、又、生きていくために必要なものが欠乏する時にその「渴き」を覚えるそうです。皆さんは、そのような「渴き」の経験をした事がありますか。

イエス様はその「渴き」の経験を十字架上で体験されました。神であり、人である、この二面性をお持ちのイエス様が、人として肉体的、精神的な「渴き」を、そして神として霊的な「渴き」を覚えられたのです。

イエス様は人として、いや人以上に肉体的、精神的な苦痛を体験されました。イエス様は十字架にかかれる前より肉体的に縛られ、殴られ、鞭打たれ、又、精神的にもあざけられ、冒涇され、はずかしめられ、裏切られました。正に、心身ともに極限にボロボロの状態だったことでしょう。その傷のあるお体で重さ約80-100ポンドの十字架を背負い、あのドロローサの道のり約650ヤードを歩かれたのです。(途中、クリア人シモンの助けもありましたが…) その後、イエス様は真っ裸の惨めで無残なお姿で十字架に架かれたのです。人間は体より大量に出血すると、体は非常な渴きを覚えるそうです。ましてや、イスラエルの乾燥した気候の中で6時間以上も十字架の上で苦しまれたのです。人間としては肉体的、精神的に極度の「渴き」をご経験されたのでした。

そして、イエス様は神の御子としても霊的な魂の「渴き」も経験されたのです。父親の御心を完全に成し遂げたいという、使命を遂行する決意の「渴き」なのでしょう。旧約聖書でイサクが何も言わずに父アブラハムに従った、その事を思い浮かびました。もちろん、十字架上の死は、他の何ものにも比べる事ができないような、それは非常に無残で過酷で苦痛な死だったのです。更に、十字架の死はイエス様がおひとりで受けなければならない孤独な死だったのです。あたかも、自分を見捨てるように見える父に対して、イエス様は父の愛に「渴き」を覚えて

おられたのでしょうか。又、救い主としてこの世の送られたイエス様は私達の救いに対する「渇き」もあったのではと思います。ご自分が十字架上で苦しんでいるのにも拘わらず、まだ救いにあずからない人たちを思い、それを悲しんで「渇き」を覚えられていたのでしょうか。私達は日本の家族や兄弟姉妹の救いを思えば「渇き」を覚えますが、イエス様の「渇き」はその思いを遥かに超えた全人類の救いに対する「渇き」だったのでしょう。

数年前に聞いたサドルバック教会の主任牧師リック・ワーレン先生の証しを思い出しました。先生のお父さまが危篤で、病院のベッドに横たわっていた時の事です。お父様が何か言おうとされていたそうです。ワーレン先生が「お父さん、何を言いたいのですか。」と耳元で尋ねたところ、お父様は "Reach one more for Jesus"と言われたそうです。最後の最後まで福音を語るお父様でしたと先生が言われていました。臨終の場でも世の救いに対する「渇く」があったのです。

イエス様はサマリヤの女に「この水を飲む者はだれでも、また渇きます。しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちの水がわき出ます。」(ヨハネ 4:13, 14)、そして「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」(ヨハネ 7:37, 38)と言われました。その「命の源」であるイエス様が十字架上で極度の「渇き」を覚えられたのです。十字架上でイエス様、「命の源」である水を提供されるお方が「渇き」を覚えられるほど、十字架は辛く苦しかったことでしょう。肉体的、精神的、そして靈的に苦痛の限界、そしてその苦痛の結集がイエス様が亡くなる前、寸前だった苦しみの言葉、「私は渇く」に表れたのだと思います

でも、その「渇き」は、私の為だったと理解するには何十年も掛かりました。まだ、神様を知らない頃は、特別に何の目的も無く「人生はこんなものかな」と言う軽い感覚で生きていました。アメリカ人の主人と出会い、親の反対を押し切り、アメリカに移ってきました。その頃は英語も話せず、友達もいない、生活も苦しい、「なぜ国際結婚をしてアメリカまできたのだろうか。他にもっと良い人生があったのでは」と毎日悲しみ苦しみました。今、思えば、それは私の「渇き」だったのでした。

でも、神様のご計画は素晴らしく、まだイエス様を知らなかった私に主の助けの御手を授けて下さいました。それは、その時期にご近所に住んでおられた日本人の方を出会わせて下さった事です。その方よりサンディエゴ日本人教会に導かれ、その数年後に洗礼を受けました。でも、確かな救いの確信が無かった私は、燃えるような思いで洗礼を受けた後は、徐々にその炎が煙に変わり、私は自然に教会を離れたのです。そして、礼拝には行かない、お祈りはしない、聖書は読まないというような、もとの「渇き」の生活に戻っていました。実に私は迷える「渇き」を覚えた子羊でした。神様は再度、私に助けの御手を授けて下さいました。そのような私をイエス様は探し求めて下さっていたのです。「あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている者がいたとする。その一匹がいなくなったら、九十九匹を野原に残しておいて、いなくなった一匹を見つけるまでは捜し歩かないであろうか。」(ルカ 15:4) そして、再度、教会に通うようになり、現在に至っています。このような私の為にもお命を捨てて下さったイエス様のことを思う度に、私は「もったいない」と言う気持ちになります。でも、聖書には「あなたはわが目に尊く、重んぜられるもの、わたしはあなたを愛する」(イザヤ 43:4a) と書かれています。このみ言葉は私に力と、希望と、平安を与えて下さいます。ハレルヤ、感謝!

今年は十字架上の7言のシャアリングに主人と共に参加させて頂き、より深くイエス様のお言葉を学ぶ機会を与えられて主に感謝しています。あの十字架にかかれ、苦しみを受けたイエス様、それは私の為だったと再度確認させて頂きました。今の時代、私達は「喉の渇き」はあまり経験しないでしょう。実際に蛇口をひねれば「水」は流れます。お店に行けば「水」は買えます。でも、霊的な魂の「渇き」は常に経験します。クリスチャンでも、クリスチャンでは無くても、人生の「渇き」は皆さんが経験することでしょう。その「渇き」を潤して下さい方は、イエス様しかおりません。十字架上の「渇き」を制覇され、死を打ち破り、今は全能なる神様の右に座しておられますイエス様。私の全ての「渇き」をご存知で、その「渇き」を唯一「潤して」下さるお方。サマリヤの女が「その水をください」と言ったように、私もイエス様に「私の渇きを潤して下さい」と祈りつつ求め、日々を過ごして行きたいと祈ります。また、その「命の水」を日本の家族、親戚、友達、周りの方々に少しでも知って貰えるように、この小さきものを主が用いて下さいますようにとお祈り致します。

6. 「すべてが終わった」 ヨハネ19章30節

Gerald Scott 兄 (英語部：英語圏の方なので省略します。)

7. 「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」 ルカ23章46節

町田哲哉兄

神に委ねるとは、どういうことでしょうか。カソリックの司祭で、作家のヘンリー・ノウエンは、彼の著作の中でサーカスの空中ブランコ乗りのスターに演技の秘訣を聞いた話を書いています。それによれば、「サーカスの観客は飛び手がスターだと思っていますが、本当のスターは受け手だということです。うまく飛べる秘訣は飛び手は何もせず、全て受け手にまかせることなのです。飛び手は受け手に向かって飛ぶ時、ただ両手を広げて受け手がしっかり受けとめてくれると信じてジャンプすることなのです。空中ブランコで最悪なのは飛び手が受け手をつかもうとすることなのです。」

この言葉を聞いたノウエンは一つの啓示を受けます。「恐れなくてもよいのだ。私たちは神さまの子ども、神さまは暗闇に向かってジャンプするあなたを闇の向こうでしっかり受けとめてくださる。あなたは神さまの手を掴もうとしてはいけない。ただ両手を広げ信じる事。信じて飛べばよい。」のだと。

神様が我々を掴まえてくれることを信じてジャンプすること、これが「ゆだねる」という事の意味です。「父よ、わが霊を御手にゆだねます」ということばの中には、完全なる謙遜、完全なる愛、完全なる明け渡し、徹頭徹尾の信頼と従順が告白されています。御父に対する揺るぎない信頼こそイエスの生涯に渡り一貫したもので、これは十字架上で亡くなる時まで変わりませんでした。

子としての父に対する完全な信頼と従順こそ、神と我々を結ぶ命の絆です。そして、受難を通してこの命の絆の栄光を現わして下さった救い主イエス・キリストに、信仰者としての私が少しでも近づけるように、残りの人生を歩んで行きたいと思います。

ラッドとし子